

にても御覽被成度旨承知仕候。一向不存寄事傳聞の謬語と存候。是は郷人伊藤齋宮と申者、遺文を集候て白雪樓集と申一部有之由承及候。若此事にても御座候や、夫にても強て不足續高覽ものと奉存候。

一、室新助詩文集有之版布も仕候や、鳩巢文筆兼て御所望思召候へ共、未被爲得候。私從遊候條、何にても詩文手書の品、一二紙にても御望に思召候。且詩文小冊も候はゞ御寫取被成候て、御返可被成候。鳩巢男物故、只今幼孫の代と御聞及、夫故室家へは直には不被仰入旨、逐一奉承知候。

私事弱冠以來從學仕、經説を始め文章歌詩の類、遺逸も不仕程に仕置候。任御望文集の首卷一冊備高覽候。且鳩巢外甥大地新八郎と申者、弊邑に仕官仕候。此者於文學は頗傳家學申程に御座候。比年經説以下編集に志し大半成功申候。版布の心得は無御座候。成就仕候はゞ候家へ呈可申候。手書の品も任仰、楷書一通仲秋臥病思故人二首、草書一通客、進呈仕候。御笑留に供候。

一、稻若水著庶物類纂、若水死後覺仲と申者續補。且又食物傳信と申一書の儀、御傳聞被成候。覺仲所持仕候や、類

纂も若水所持仕候やの旨、逐件承知仕候。覺仲は内山氏にて是も弊邑醫官相勤候。類纂補書の儀は、若水遺命仕候譯にても無御座候。關東より御用に付、乍疎學草稿等を以て續紹仕事と相聞え申候。正續合部千卷に御座候。食物傳信の儀は、尊書の趣にて初て致承知、則覺仲へ相尋候處、一二卷は見候へ共、若水歿後此類不殘寡君文庫へ納候故、全篇は見不申候。類纂草稿も庫中へ納候て、覺仲は所持不仕候旨申聞候。右の趣宜預御披露候。恐惶頓首。

五月晦日

青地藤太夫禮幹

田中左膳殿

追啓。鳩巢文集首卷一冊は高覽相濟候はゞ、被反下候様に奉願候。副寫無御座候故申上置候。以上。

一、小倉中將來書と返翰 (二)

一翰令啓候。炎暑の節清勝至祝。五月晦日の返翰本月十二日相達、早速令披誦候處、進入申候拙作の和御斷の様子、近頃不本意事遺憾不過之候。何卒後便に枉て高和給、舊作詩文少々録示可給候。珍藏可申候。偏に可預點頭候が願望に候。拙作の韻を和給候と申事、大家の儒に喪々敷御座

候か、不堪慚愧候。

一、鳩巢先生手書の詩二通此度惠投、千萬大慶年來の望と存候處、落手多謝不盡、早速糊塗令賞吟申のみ。

一、同賢文集の首卷も、此度一策管觀欣幸に存候。猶寫次第屹度可令返璧候。尤不佞手寫いたし候故、隙入の上公用甚紛々、依可及延引儀も可有之候間、其段は御了簡頼入候。

副本無之由成程左可有之儀と存候。且詩集も可有之事と察入候。右の文集に四六七三策の内、抄出可申と存處有之間、可成儀に候はゞ借用申度と存候。鳩巢一世の集夥しく可有之と存候。湖亭隨筆・庶物類纂等の序も鳩巢と存候。不佞甚鳩巢の經義に委きを敬服申候。大學新疏珍玩申候。外にも經書類・文集等上梓無之由、滄海遺珠の嘆のみに御座候。足下等高才企も可有之事かと存候。

一、大地生事承及候。鳩巢の外甥、定て家學傳來不堪歎羨候。比年經説以下編集に志あり、大半成功の由。成就の後不佞へも可被示旨、多謝々々。大地詩文の物、爲予少々御求可有之様頼入度候。可爲欣幸候。

一、稻若水・覺仲事委細被示、承知いたし候。稻子遺編藩府

へ納り候由、爲國には珍賞に可成候へ共、世上不許覽殘念。類纂は不佞存候京師醫家に、彼是ひそかに寫置候もの有之候。是も稻子に親炙いたし候者のよしに候。心事期後昔之時候。先達の書籍落手の儀も早速申入度、旁如此に候。不宣。

六月十四日

小倉 中將

青地藤太夫殿

尙々本書に申入候品、先は點頭希入候。且又白雪樓の事、成程伊藤齋宮事に候。足下之様に覺申候。右齋宮作も一二首八居題詠の附録に載せ有之たると覺申候。右の全部不堪想像、刊本にて京師へも來候冊子にも候や如何と存候。御郷人に候はゞ、序候節御尋可有之候。何卒見申度事に存候。此人存生に候や如何。事餘期回翰候也。

一、從中將様爲御再答、本月十四日御手書被成下、如例大森傳達忝拜誦仕候。大暑の節倍御清嘉奉欣幸候。御盛作に拙和の儀奉辭退候處、重て蒙仰忝仕合、不願鄙陋次韻も可仕儀に御座候へ共、此間不存掛、俄に寡君今年江戸留守詰役被申渡、來月廿日過東行の儀出來、吏職殷繁一向詩情の催無御座、日夜紛劇の仕合、御厚免被下候様に奉願候。